

岩の上に葉を小さく巻いたような形のものが多数落ちていた。オトシブミだ。「落し文」に由来する優雅な名前をもつ小さな甲虫が、せつせと葉を巻いて、子供のためにエサと居室を準備したものである。人の目にふれないこんな山奥にも、子孫繁栄のための営みがひっそりと続けられている。

沢は所々ヤブがかかるようになっていた。もうおしまいである。一六時〇五分、沢から離れてやぶこぎに入る。一〇分程で尾根に出た。

(記)

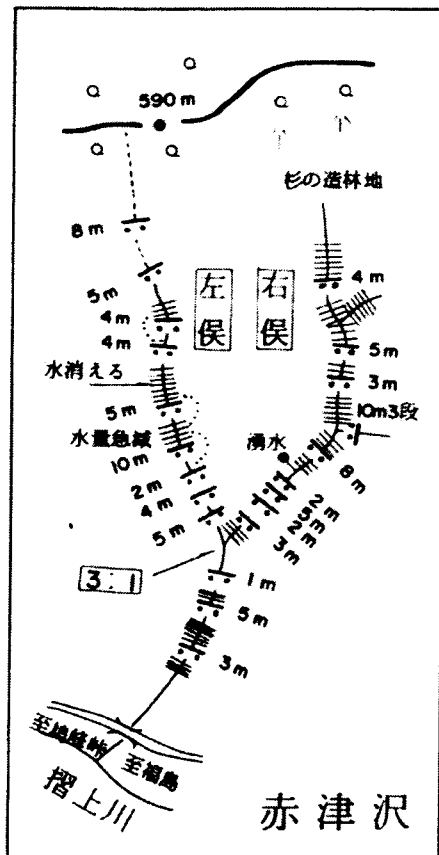
「タイム」 赤津沢出合(一五:三〇)
 ↓二俣(一五:三五) ↓遊行終了
 (二六:一五)

赤津沢右俣

一九八三年六月四日

一四時一五分、下降開始。実はこの時点では小スリバチ沢に入ったつもりであった。尾根一本の遠いであるが、稜線上でおおざっぱな地形確認をしただけで下りはじめたのが失敗のもとだった。途中まで下って変だと思いはじめ、左俣が合流した所で、赤津沢右俣を下ってしまったのだとはつきり自覚した。

雑木林をぬけると笹原となり、その下は手入れの悪い杉の造林



地となっていた。このあたりあちこちにウドがかたまって生えており、もう少し早くくれば良かったと悔やむ。

一四時三〇分、水流が出てきて、いよいよ本格的な沢下りとなる。小滝が出てくるが、ブッシュを利用し

て簡単に下る。この沢もナメが発達している。

やがて八びの滝。右岸をクライミングダウンする。この先で岩質が変わった。花崗岩が一度バラバラになりかけた所で再び固まったという感じの岩質となる。そして小滝が続く。一五時二〇分、二俣。左俣の方が水量はぐっと多い。

左俣を登り返し、予定通り小スリバチ沢を下ることに決め、ザックを置いて、国道三九九号まで偵察に出る。途中五びの滝があり、右岸を捲いて下った。国道到着一五時三〇分。

(記・西 和文)

「タイム」 下降開始(一四:一五)↓
二俣(一五:二〇)↓国道(一五:三〇)

カラブ沢(尻滑沢)

一九八三年五月二八日

一〇時三五分、下降開始。一〇分程下ると沢に出た。こちらの方の沢もすぐ小滝をまじえたナメが出てくるが、下降到困難な所はない。やがて沢が急に明るくなる。杉の造林地である。管理が悪いのか、大雪に痛めつけられたのか、曲がったり、枝折れした杉が、ブッシュに負けまいと精一杯頭をもたげていた。

再び樹林帯の中に入る。二カ所で大岩が沢をふさいでいた。やがて一五び二

段の滝の上に出る。持参のおにぎりを食べてから、おもむろにザイルをとり出し、懸垂下降する。登ることならできそうな滝である。その先はすぐ国道であった。(記 一三)

「タイム」 六三三三三角点・下降開始(一〇:三五)↓下降終了・国道(一一:二〇)

